

## 京都・大阪方言における待遇表現の変容

石橋 孝章

本修士論文（以下、本論文）は、京都・大阪方言の待遇表現について、現代における運用の状況や変容を明らかにするものである。

まず、第一章で研究の目的について述べた。

京都・大阪方言のハルは、話し相手待遇では尊敬語として機能するが、特に京都市方言で、第三者待遇では幅広い動作の主体を待遇できる。たとえば、「猫が歩いたはる」などといえる。全国的な方言衰退現象のなかで、このハルに変容や共通語化の傾向がみられないかということは確かめる必要がある。そこで、京都・大阪方言におけるハルを中心とした待遇表現を研究対象とした。

続いて、第二章では先行研究を検討した。

これまで、泥棒、動物、身内など、共通語の尊敬語の対象にならないものに対する第三者待遇でのハルが報告されてきた。「親愛語用法」（岸江信介（一九九八）「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」国立国語研究所編『日本語科学』三二・三・四六頁 国書刊行会）や「三人称指標機能」（辻加代子（二〇〇二）「京都市方言・女性話者の「ハル敬語」——自然談話資料を用いた事例研究——国立国語研究所編『日本語科学』一〇 五六・七九頁 国書刊行会）など、理論的説明も提出されているが、調査はまだ十分なものとはいえない。近畿方言では、第三者待遇で待遇表現を多用する傾向があるといわれる（宮治弘明（一九八七）「近畿方言における待遇

表現運用上の「特質」『国語学』一五一 三八・五六頁 日本語学会）が、この現象は特に女性に顕著なため、ハルの研究も女性話者に注目したものが多かった。しかし、女性話者の傾向を明らかにするためには、男性話者についても調べなくてはならない。

また、尊敬語としてのハルが共通語の敬語といかに使い分けられ、どの程度の待遇度を表すのかという点も十分明らかにされていない。

大阪方言のヤルについては、運用の仕方に変化がないかということに加え、形式そのものの衰退がみられないかを調査する必要がある。

上記の課題をふまえ、行なった調査の概要を第三章で述べた。

調査対象地域は、京都府京都市、大阪府大阪市、枚方市、堺市とした。

大阪方言については、ヤルについても調査した。

京都市方言話者については、京都市で言語形成期を過ごした話者にインタビュー調査を行なった。一〇代女性一名、二〇代女性七名、二〇代男性三名、五〇代女性二名、五〇代男性二名、六〇代女性一名の一六名である。また、京都市上京区の高校の生徒を対象に、アンケートを実施した。有効回答は、男子四〇名、女子四〇名であった。

大阪市においては、インタビュー調査を二〇代女性三名、二〇代男性二名、五〇代女性二名、七〇代女性一名に対して行なった。さらに、大阪市以外の若年層の現状も明らかにするため、枚方市・堺市の小学校でもアンケート調査を行なった。

続く第四章では、京都市方言についての調査結果をまとめた。

ハルの語形については、中井精一（一九九二）「関西共通語化の現状——大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって——」『阪大日本語研究』四 一七・三二頁 大阪大学文学部日本学科（言語系）で京都型とされたものを従来の形と考えた。これは、五段動詞、カ変動詞、サ変動詞への接続が、それぞれ、イカハル、キヤハル・キヤハル、シヤハル・シヤハルとなり、テ

イル形がタハルとなるものである。調査の結果、一〇代・二〇代は、イカハル、キハル、シハルという回答が多かった。ただし、高校生の結果では、キヤハルもしくはキヤハルが保存されている場合には、シヤハルもしくはシヤハルも保存されていることが多かった。また、テイル形については、どの世代でもタハルがある程度保存されているが、テハルも同程度みられた。キハル、シハル、テハルを使うのは、中井精一（一九九二）によると大阪型であり、京都市の若年層において、五段動詞の接続以外では大阪型と同形になってきているといえる。近畿地方における大阪方言の地方共通語化が、ハルについてもいえるということかもしれない。

次に、話し相手待遇の目上に対してのハルについては、若年層では、男女とも親しい先輩には使えるが、高い待遇となると、女性ではある程度使う話者がいる一方、男性は使わない傾向にあった。

レル・ラレルについては、男女各世代とも、話し相手かつ動作主が目上の人物である場合に使われやすいだけでなく、動作主（話題の第三者）が目上でない場合も聞き手が目上なら使われやすく、一方で、友達と話すときには動作主（話題の第三者）が目上でも使われにくいことがわかった。対照的に、ハルは、話し相手としての校長先生を待遇するときよりも、第三者としての校長先生を待遇するときのほうが、聞き手に関係なくよく使われている。

井上史雄（一九八一）「敬語の地理学」『國文學―解釈と教材の研究―一月臨時増刊号 敬語の手帖』二六・二 三九・四七頁 学燈社）は、尊敬語や謙讓語を目上の人が目の前にいないときにはあまり使わないという、丁寧語に近い発動の仕方を「敬語体系全体の丁寧語化」と呼び、全国的にみられるとした。今回の調査では、京都市においても共通語形のレル・ラレルがこの「丁寧語化」にあてはまる運用の仕方で行われているにも関わらず、ハルの運用の仕方には影響していないことが明らかになった。

また、話し相手待遇のレル・ラレルとハルの使用や、自分が使われたときにどう感じるかという意識についての調査から、特に若年層では、レル・ラレルが非常に目上の人物に使う尊敬語で、かつ聞き手も目上であるときに使う表現とされており、ハルとのすみわけが進みつつあるといえる。複数の話者から聞かれたキーワードである「親しみ」と敬意を同時に表すハルと、共通語の敬語との違いが意識されていると推測できる。

目上の人物に対する待遇表現は、レル・ラレルとハルの使用場面や役割の違いが明確になってきている点で変容しているといえるが、レル・ラレルの使用条件の「丁寧語化」は、第三者待遇で待遇表現を多用するという体系全体には影響を及ぼしておらず、ハルとレル・ラレルのすみわけもある点を考えれば、ハルは今後も生き残っていくと考えられる。

本章では、調査をふまえ、ハルの機能についての理論的説明も試みた。第三者の動物、父親、知らない人、目下の人物などを待遇するハルは、尊敬語のハルの拡張として、「低めない」という機能があると説明できると考える。第三者のボーイ捨てをした知らない人に対するハルは、尊敬語とはかけ離れているようにみえる。しかし、第三者の目下にハルを使わない傾向の高校生男子が、第三者のボーイ捨てをした人には半数以上が使うとしたことから、ハルを尊敬語と捉える意識が強く、ボーイ捨てをした人であっても知らない大人であるから「低めない」ためにハルを用いるのだと説明できそうである。また、動物、父親に対するハルは、調査の回答から、「親しみ」や「距離を置く」という意識で使われることが多いのだが、これらの意味合いは尊敬語のハルの性格と繋がる部分がある。

次に、第五章で大阪方言について述べた。ハルの語形については、中井精一（一九九二）などから、大阪方言では、従来、五段動詞にはイ段で接続し、五段動詞以外には連用形にハルで接続、テイル形はテハルの形をとる、というものであったとみられる。大阪市に

おける調査結果から、先行研究で大阪型とされていたキハル、シハル、テハルが世代に関わらず使われているが、五段動詞については、若年層を含めてア段接続（イカハルなど）がみられる。古くは大阪でも使われたア段接続が残存しているのか、京都からまた近年流入しているのかはわからないが、京都のイカハルに対して大阪はイキハルである、とは単純にいえないようである。

大阪市におけるハルは、話者によっても分かれるが、高い待遇を表わせない場合があり、おおむねレル・ラレルがそれに代わる高い待遇を表す。また、京都市と同様、ハルについて「親しみ」というコメントが複数の二〇代話者から得られた。

話し相手待遇で非常に目上の人物にハルを使っていない話者は、第三者待遇では使う場合が多かった。第三者待遇で待遇表現を多用する近畿方言の特徴から、第三者待遇になったときに、方言形のハルが選択されたと考えられる。

「ケガをした知らない大人の男性を話題の第三者として待遇する場合」にハルを使うかという質問では、大阪市の二〇・三〇代、五〇代、七〇代いずれも使うと回答している。しかしケガをしたのが中学生の場合や、「ポイ捨てをした大人の男性」の場合は、二〇・三〇代全員が使わないというケガをした大人の男性には第三者のハルを使い、中学生には使わないことから、若年層では第三者でもあくまで尊敬語のハルとして運用されていることが推測される。知らない大人の男性は、レル・ラレルで高める対象とまではいかないが、中学生に比べれば、ハルによって「低めない」待遇をすべき対象と捉えられているのかもしれない。

枚方市・堺市については、小学校での調査から、「ケガをした知らない大人の男性」に対するハルを使う話者は約一割いたが、使わない人が多数派であった。

動物や父親は、共通語の尊敬語の対象にならないが、これらに対しては大阪市でも、枚方市・堺市でも、第三者待遇のハルが使われない。大阪方言では、第三者待遇のハルについて、京都方言よりも純粹な尊敬語としての意識が強いと考えられる。

ヤルについては、大阪市ではゆるやかに勢力を失っているようであるが、二〇代でも使用例があり、二〇代、五〇代、七〇代いずれも、第三者待遇で同輩や目下を使うという従来の用法と同様であることが確認できた。

以上の内容を、第六章でまとめた。世代間で傾向を比べるには調査が不十分なことなど、課題も残ったが、ハルと共通語形レル・ラレルのすみわけが進みつつあることなど、京都・大阪方言における待遇表現の変容の一端を、本論文は明らかにした。